

Macmillan Press.

Saad-Ghorayeb, A. 2002. *Hizbu'llah: Politics and Religion*. London: Pluto Press.

Sharāra, W. 2006. *Dawla Hizb Allāh: Lubnān Mujtama'an Islāmīyan*, 4th ed. Beirut: al-Nahār.

Sobelman, D. 2004. *New Roles of the Game: Israel and Hizbollah after the Withdrawal from Lebanon*.

Tel Aviv: Jaffee Center for Strategic Studies, Tel Aviv University.

(溝渕 正季 上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科、日本学術振興会特別研究員)

Olivier Schlumberger ed. 2007. *Debating Arab Authoritarianism: Dynamics and Durability in Nondemocratic Regimes*. California: Stanford University Press. viii+345 pp.

ホアン・リンスが権威主義体制の定義づけを行ったのは、1964年のことである。以来、リンスが研究対象としたスペイン（フランコ体制）をはじめ、権威主義研究の主たる分析対象であった南欧、中南米諸国の大半は民主化した [Bunce 1995]。

冷戦後、民主主義は、グローバルな規範のひとつとなった。無論、国際社会で飛び交う「民主主義」という言葉も、その多くはナショナルな色彩を帯びているし、そもそも民主主義の国際的な判断基準がないため、国際機関や先進国が非民主主義国家に求める「民主化」も、外形的手続きの意味合いが強いのであるが。

とはいえ、権威主義研究が始まってから、世界のかなり多くの国が民主化したのは事実である。本書の第1章で、ジョバンニ・サルトーリと共に「民主主義の理論と経験主義的研究に重点を置きすぎる比較政治研究」に大きな影響を与えたと紹介されるアーレント・レイプハルトの著作では、1999年の時点で少なくとも51カ国が民主主義を継続しており、また「第3の波」に間に合わなかったいくつかの旧社会主義諸国も、民主化に乗り出しつつある。つまり、世界の幾つかの地域では、もはや権威主義は「歴史」となりつつある [Lijphart 1999]。

このように前置きした後、「翻って、アラブ諸国は……」と来るのが、ラリー・ダイヤモンドのような政治学の重鎮から若手研究者に至るまでの、ここ10数年の「アラブないしは中東の政治」に関するお定まりのイメージであることは言うまでもない [Diamond 1999]。アラブ連合加盟22カ国のうち、先述したレイプハルトの研究で、また厳密には民主化に限定されないが、2008年度のフリーダムハウスの基準（政治的権利と市民的自由）でも、及第点に達する国はいまだ存在しない [Freedom House 2008]。

かつてシュンペーターは、「民主主義という言葉の意味しうところは、わずかに人民が彼らの支配者たらんとする人を承認するか拒否するかの機会を与えられているということのみである（中略）すなわち、指導者たらんとする人々が選挙民の投票をかき集めるために自由な競争をなしうること、これである」と批判的に述べたが [シュンペーター 1995]、今も少なからぬアラブ諸国では、リーダーの選出とはコスメティックな茶番劇に他ならない。民主化の息吹が殆ど感じられない中、少なからぬ政治研究者が、主たる問題意識を「アラブ諸国の民主化」から、「アラブ諸国の権威主義体制の源泉」に置き代えざるを得ないのも、無理からぬことかもしれない。

*

本書は、「アラブ権威主義体制の生命力」というテーマについて、あえて「民主化への移行」を

念頭に置かずに、様々な視点（国家－社会関係、体制論、経済、国際関係）から自由に論じるものである。執筆陣も、中東研究のベテランから若手まで、多彩である。

編者のオリビエ・シュルムバーガー氏は、現在 German Development Institute のシニア・リサーチャーを務めており、民主化を含む中東各国の政治分析の他、経済問題にも造詣が深い。

本書の各章で取り上げられる事例の細部を巡る評価については各地域の専門家にお任せするとして、骨子と取りあえぬ気づきの点を挙げれば、以下の通りである。

*

第1章（Olivier Schlumberger）は本書の導入部分であり、主に先行研究の紹介、問題意識についての説明が行われている。筆者の問題意識として面白いのは、権威主義体制に関する先行研究の多くが「民主化ないし民主主義を念頭に分析を進めてきたため、非民主主義研究の成果を矮小化した」と断じ、あえて民主主義とのつながりを絶ったうえで、権威主義体制の生命力を描こうとした点にある。

第1部（第2章から5章）は、「国家－社会（あるいは政治的反対勢力）関係」に的を絞っている。いわゆるミッドガル（Migdal [2001]）流の、「社会の中の国家」と国内諸勢力との闘ぎ合いに注目した内容といえる（ただし、以下の研究では、社会のマルチチュードに出くわして断片化する国家は見当たらないが）。

第2章と第3章は多国間比較研究で、第2章（Steven Heydemann）では、筆者の言う「国民的－ポピュリスト社会協定」、いわばアラブ権威主義体制と国内諸勢力の広範な共犯関係が体制に柔軟性を持たせ、生存の可能性を高めていると説く。

第3章（Ellen Lust-Okar）では、権威主義体制の調整能力に注目する。ここでは、体制の構築した数々のフォーマルな競争の構造（分割的競争および非分割的競争）を管理・操作することで、体制側は反対勢力の生殺与奪を選択できるとする。

第4章（Holger Albrecht）と第5章（Eva Wegner）は、一国研究である。ここでは、エジプトとモロッコを例に、反対勢力が政府との軋轢を抱えながらも、社会勢力の勢力均衡という、現状維持に「貢献」する様を描いている。これらの章では、合法主義的なイスラーム主義勢力が必ずといっていいほど陥るジレンマ、つまり体制に妥協（あるいは追従）することによって得るメリットと、従前の主張とのバランスをどうとるかという問題にも、簡潔に言及している。

第2部（第6章から9章）は、「体制」の事例研究である。ここでは、権威主義体制内部の諸勢力の相関関係を明らかにするとともに、様々な支配の手法を丁寧に解き明かしていく。

第6章（Peter Sluglett）では、ミッドガルに依拠しながら、一見すると手堅く見えるアラブ権威主義体制も、実際はかなりの脆弱性を持つと主張する。

第7章（Fred H. Lawson）は、権威主義体制のグループ構成に注目し、多国間比較（バーレーン、シリア、チュニジア、イエメン）を行った。この結果、（コーポラティズム的に）軍、官僚、富裕層などの多彩なグループが連携して構成する体制と、単一のグループで構成する体制では、しばしば政策の結果を巡っての違いがみられるとした。

第8章（Daniela Pioppi）では、専ら制度的なもの、ここでは体制の戦略に重点を置いており、ここではエジプトの現行ワクフ制度がムバラク体制を利する構造について、興味深い論考を行っている。

第9章（Marc Valeri）は、オマーンのカーブス体制の正統性維持のメカニズムを検証し、新旧の制度を生かした強固な支配を揺るぎないものとしつつも、それが一代限りであるという問題点に

も触れている。

第3部(第10章から12章)は「経済と政体」という観点から、権威主義体制を検証している。アラブ権威主義体制を支える経済体制といえば、豊富な資源に依拠したレンティア経済と、その分配によるパトロン-クライアント関係が挙げられるが、ここでは、これまであまり光の当たらなかったグループにも注目している。

例えば第10章(Giacomo Luciani)は、湾岸産油国での自律的な「ブルジョワ」の成長に注目し、それらは民主化を志向していないものの、国内経済に変化をもたらす新興勢力になる可能性があると言及する。

反対に、第11章(Thomas Richter)では、エジプトの「ブルジョワ」(軍人、公務員をはじめ国家の雇用する中産階級)が改革を促す勢力ではなく、権威主義体制の利権分配構造の一翼を担っているという事例を紹介している。

第12章(Philippe Droz-Vincent)は、軍とビジネスの関係を読み解く。汎アラブ主義の華やかなりし時代と異なり、近年、軍は政治から身を引きながらも、経済的な権益を掌握しており、結果的には権威主義の後ろ盾となる、いわば共犯関係とする興味深い論考を行っている。

第4部(第13章から15章)では「国際関係」とアラブ権威主義体制の関係について論じている。石油・ガスという重要資源の集中地帯であるがゆえに、アラブ諸国の政治力学には様々な「外部」の力が働いているが、第13章(Mustapha K. Sayyid)では、この特殊な事情が、「西洋」のアラブ民主化への無関心と現状維持という国際的環境を醸成していると説く。

第14章(Eberhard Kienle)ではエジプトを例に、外部が民主化を求めたとしても、用意されるのは巧妙な抜け穴だらけの「民主的」手続きに他ならず、結局は権威主義体制が強化されるという逆説的現象について、手堅い論考を行っている。

第15章(Paul Aarts)は、米国-サウディアラビアの「特別な関係」を例に、2国間外交の硬直化を、「9・11」事件以降の状況も絡めて詳述している。今後、サウード家支配が存続するにせよ、しないにせよ、同国と米国の関係に関し、筆者はあまり明るいシナリオを用意していない。

*

本書の方向性について編者は、執筆者らがアラブ権威主義体制について自由闊達に論じられるよう、あえて共通の問題意識や枠組みを設けていない。

確かに、本書に収録される論文の幾つか、特に第4部収録の各章は示唆に富んだ内容になっているし、アラブ諸国以外の権威主義体制を研究する者にとっても、地域間比較の新たな可能性を発見するという点で有益な書といえるであろう。

ただ、自由な構成ゆえに、本書がありきたりな、アラブ権威主義体制研究の論文集に仕上がってしまった感は否めない。特に、権威主義そのものの定義づけが執筆者によって曖昧なため、正直なところ、読んでいる途中で何度も違和感を覚えた。

また、権威主義の生命力を共通のテーマとし、これだけ多くの貴重な論点が提示されているのだから、終章を設けた上で、総括ないしは暫定的評価を行うのが筋だったのではなからうか。ある程度アラブ政治研究を進めた者なら「拾い食い」をすれば良い話だが、初学者や他地域の専門家には不親切な構成かもしれない。

それにしても、こうも「高度に発展した」権威主義体制の数々を見せつけられると、この分野に対する評者の認識はまだ甘かったと感じるところ大である。アラブの権威主義体制とは何か、今一度、原点に立ち返らせてくれる良書といえる。

引用文献

- シュムペーター、ヨーゼフ 1995 (中山伊知郎、東畑精一訳) 『資本主義・社会主義・民主主義』 東洋経済新報社.
- Bunce, Valerie. 1995. "Comparing East and South," *Journal of Democracy* 6(3), pp. 87-100.
- Diamond, Larry. 1999. *Developing Democracy: Toward Consolidation*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Freedom in the World 2008: Selected Data from Freedom House's Annual Global Survey of Political Rights and Civil Liberties*. 2008. Washington D.C.: Freedom House <<http://www.freedomhouse.org/uploads/fiw08launch/FIW08Tables.pdf>> 2008年6月7日時点.
- Lijphart, Arend. 1999. *Patterns of Democracy: Government Forms and Performance in Thirty-Six Countries*. New Haven: Yale University Press.
- Migdal, Joel S. 2001. *State and Society: Studying How States and Societies Transform and Constitute One Another*. Cambridge: Cambridge University Press.

(吉川 卓郎 立命館アジア太平洋大学非常勤講師)

James A. Millward. 2007. *Eurasian Crossroads: A History of Xinjiang*. New York: Columbia University Press, xix+440 pp.

ユーラシア大陸の中心に位置し、天山山脈を境として、北にジュンガル盆地、南にタリム盆地を内包する地域は、古来より中国やインド、ロシア、地中海を結ぶユーラシアの十字路として栄え、諸民族の興亡の舞台となってきた。かつて西域の名で知られたこの地域は、18世紀の清朝による征服以降は「新しく開かれた地」を意味する新疆 (Xinjiang) という名称で呼ばれるようになり、現在は新疆ウイグル自治区として国土の6分の1を占める中国最大の省区となっている。

新疆ウイグル自治区の主体民族は、テュルク系言語であるウイグル語を母語とし、スンナ派のイスラームを信仰するウイグル人である。漢族が人口の圧倒的多数を占める中国のなかで、新疆はウイグル人をはじめとするエスニック・グループが過半数を占めるという例外的な状況にあり、民族・言語・文化の多様性という点において他の地域にないきわだった特徴を有している。この10年来、新疆はチベットとならぶ中国の民族問題の焦点地域としてたびたび各国のメディアによって取りあげられてきた。最近では、カシュガルやクチャで起こされたウイグル人による事件が報道されたことも記憶に新しい。

本書の著者、James Millward は、アメリカ、ジョージタウン大学の准教授であり、中国および新疆・モンゴル・チベットを含む内陸アジアの近現代史を専門とする気鋭の研究者である。本書は、ユーラシアの十字路として、移民や交易、征服などによる周辺地域との相互作用によって形成されてきた「新疆」の歴史を、学術的かつ包括的に叙述しようとする英語によるはじめてのモノグラフであり、目下、世界的な関心を集める当地域について、その歴史と現状を理解するための格好の書となっている。以下ではまず本書の内容を概観したい。

本書の本論は7章から構成されており、その前後に序と結語が付されている。まず序においては、